特別講演　1

京都と性科学——性科学京都学派の現代史

友吉唯夫

京都は日本における近代性科学誕生の地である。そのはじまりは、一九二〇年代前半のことであるが、反国家的な学問と見なされていた性科学の京都での興亡の歴史は、日本近代思想史の一断面を物語るものである。

京都に性科学を創始しようとした人として山本宣治（一八八九～一九二九）と安田徳太郎（一八九八～一九八三）の二人の名をまず挙げなければならない。二人はいとこ同志であり、年齢は九歳もちがうが、山本が青年時代をカナダで過ごしたため日本での高等教育が遅れ、学究生活はほぼ同時期に開始している。二人は車の両輪のごとき関係で、京都の地に性科学を樹立しようと情熱を傾け、官憲による弾圧のなか、山本は政界に転じて暗殺され、安田も失意のうちに京都を去って東京で診療所を開くことになる。しかしこの二人の先駆者的活動を支えた京都の学問的風土は、当時より現代に至るまでけっして失われてはいない。

山本宣治と性学

ここに「山本宣治と性学」としたのにはわけがある。山本はもっぱら性学という語を用いていたのである。性学がセクソロジーの日本語訳として適切であるということと、たんに医・生物学のみならず、社会学、芸術学、文学、歴史学

などの領域も含むという考えからである。ただし山本はイモリの精子を研究する生物学者として出発した。指導者は京都大学理学部の川村多実二教授である。川村は青年の性の悩みに理解の深い人であった。山本は同志社大学予科講師として生物学を担当するにあたり、日本の青年の科学的性知識の欠落を解消すべきだと考え、講義の大半を「人間生物学」に充て、のちに名著『性教育』（内外出版、一九二三）が世に出ることになる。

山本と安田の二人は、一九二二年に「性学読書会」を設立した。会長を京大医学部生理の石川日出鶴丸教授とし、川村多実二教授、京都府立医大生理学の越智真逸教授、京大の木原 均（遺伝学）、駒井 卓（人類遺伝学）など医・生物学領域の研究者約十五名が外国文献の紹介を中心に討議を重ねることになった。このような学際的な研究会は当時としては画期的なことであった。

越智は性現象に関心の深い生理学者で、のちに『ホルモン』という著書で、この言葉を日本の医学界に定着させたのである。石川は『生理学研究』の主幹であったが、山本の論文「若い男の性生活」の掲載を認めたところ、東京大学生理学永井 潜教授より、掲載中止の要請がきた。石川はそれに応ぜず、八回の連載を許したのであった。

山本は性学の先駆者たるにふさわしく、関連用語をいくつも創出した。（ ）内は山本が否定した従来語であるが、自慰（手淫、自瀆）、性欲（淫欲）、性交（交接、交媾）、性病（花柳病）などであり、また遺精、夢精も造語した。とくに自慰は、当時の青年を苦しめていた手淫有害論に反対する立場から生まれたものである。

山本の活動は、産児制限運動（受胎調節）を始めた頃から学園の域を越えて社会にひろがり、さらに政治の世界に身を移したため、四〇歳の若さで落命することになった。

安田徳太郎と性科学

山本宣治が日本の性教育、性科学の先覚者として歴史に名をとどめるに至った経緯のなかで、安田徳太郎という医師

の功績を忘れてはならない。学生や労働者の性の実態調査を立案したのは安田であり、調査用紙に書かれた協力依頼文は安田がつくった名文である。性科学という言葉も安田の造語であるが、すぐれた語学力で外国の文献を次々と読んでは得られた知識を山本と共有した。安田がとくに愛読したのは、イワン・ブロッホ（一八七二～一九二二）の『現代の性生活』（一九〇九）で、人間解放の世界を開く書だと評価した。受胎調節にしても、医師である安田のほうが山本よりも高い関心を示していたが、山本がカナダ留学で体得した英会話能力で来日のサンガー夫人に接してから、安田以上に精力を注ぐことになったのである。

一九二九年、安田は哲学者の戸坂 潤（一九〇〇～一九四五）や太田武夫（典禮）（一九〇一～一九八六）らとプロレタリア科学研究所京都支部を創立する。翌一九三〇年、中央公論に「医学の階級性」を執筆して、封建的な医局制度を批判したため、京大内科教室から追放され、東京に居を移すことになる。

東京では、青山に診療所を開設するが、虐殺された小林多喜二の遺体解剖に尽力するなど、反官憲的行動を重ね、戦後は活発に翻訳と著作の仕事を続けるが、そのなかで性科学については、かつての山本と共同でおこなった実態調査にもとづく『性科学の基礎知識』（一九五〇、世界評論社）がある。

そのほかの性科学京都学派の群像

京都の反権力的思想環境が危機的情況に追いこまれた一九三〇年代以降にも、性科学の火を消さずに戦後の再燃につないだ人びとが存在した。紙幅の関係でかんたんに列挙するにとどめたい。

○太田典禮（武夫）（一九〇一～一九八六）

京都府野田川町出身。九州大学卒、京都大学産婦人科入局、子宮がんの研究に従事中、安田徳太郎に触発されて産児調節（避妊法）の研究に転じ、一九三二年、金製の避妊リングを作製、一九三六年禁止される。治安維持法違反で獄中四

年。一九七六年、日本尊厳死協会理事長。

○巴陵宣祐（一九〇二～一九七七）

富山県高岡市出身。一九二六年京大医学部卒業後、石川日出鶴丸教授に師事、性科学、生殖生理学を軽視しない学問的雰囲気に身を置くこと三年、あと産婦人科に転じ、大阪高等女子医専教授など歴任のあと故郷で開業。一九三〇年、『人類性生活史』を出すも直ちに発禁。一九四七年、京都印書館より復刊。

○豊島順二郎（一九〇二～一九八四）

新潟県出身。京大医学部卒業後、大学院にて産婦人科学の研究。前橋日赤病院医長のあと東京都内で開業。『子どもの性生活』（一九五一、西荻書店）を出す。一九八一年、人間の科学社より復刊。

○朝山新一（一九〇八～一九七八）

戦後の日本に、性科学を復活させた人である。京大理学部卒業後、動物発生学を専攻。生殖細胞から性の分化、さらに性行動論に及ぶ『性の現象』（一九四八）を出し、性教育への基礎とした。一九四九年、男子六九三名、女子二八三名を対象とした調査をまとめて『現代学生の性行動』を著わし、大きな話題を呼んだ。『性教育』（一九六七年、中公新書）は多くの教師、両親に読まれている。

（滋賀医科大学名誉教授）